解題

『観経疏』解題

一、『観経疏』と法然上人

法然上人（一一三三～一二一二）が浄土宗を開宗されたのは、承安五年（一一七五）上人四三歳の時であったという。当時のことを法然上人は『選択本願念仏集』の最後に、

ここに於て貧道、昔この典を披閲して、粗素意を識り、立ろに、余行を捨てて、ここに念仏に帰す。それよりこのかた今日に至るまで、自行化他ただ念仏を綜とす。然る間、希に津を問うものには、示すに西方の通津をもってし、適行を尋ぬる者には、誨うるに念仏の別行をもってす。これを信ずる者は多く、信ぜざる者は尠し。当に知るべし。浄土の教え、時機を叩きて、行運に当るなり。念仏の行、水月を感じて、昇降を得たり。①

と述べておられる。

「貧道（法然上人自身の謙遜語）、昔この典（『観経疏』をいう）を披閲して」とは、法然上人が源信の『往生要集』に導かれて、善導大師（六一三～六八一・以下敬称を略す）の『観無量寿仏経疏』（以下『観経疏』という）に出会った時のことである。そして「それよりこのかた今日に至るまで、自行化他ただ念仏を綜とす」というのである。善導の『観経疏』において「念仏の教え」を発見・確信して、浄土開宗して以来は、自らも念仏を修し他に誨えるのも念仏であったというのである。

法然上人のこの経緯を法弟・二祖聖光房弁長上人（一一六二～一二三八）は『徹選択本願念仏集』上に、

善導和尚の観経の疏に、一心専念弥陀名号　行住坐臥　不問時節久近　念念不捨者　是名正定之業　順彼仏願故といえる文を見得るののち、われらがごとき無智の身は、ひとえにこの文をあおぎ、もはらこのことわりをたのみ、念念不捨の称名を修して、決定往生の業因にそなうれば、ただ善導の遺教を信ずるのみにあらず、亦あつく弥陀の弘願に順ず。順彼仏願故の文たましいにそみ、心にとどまるのみ。[2]

と、伝えている。

法然上人は善導の『観経疏』（散善義）によって、浄土宗を開宗したのであるが、以来法然上人は「偏に善導一師に依る」（『選択集』第十六章）と表明され、この姿勢を崩すことなく貫かれたのである。『無量寿経』を解釈するときも巻頭に「正に善導に依り、傍に諸師に依って愚懐を述ぶ」[3]とあり、『観無量寿経』を解釈するときも巻頭に「諸師の解釈多しと雖も、今は則ち正しく善導に依り、傍に余師の釈をもって善導を輔助す」[4]とあり、また『阿弥陀経』を解釈するときも文中に「経（浄土三部経）の大旨、念仏の深義に至っては、専ら善導和尚をもって、用いて依憑とす」[5]とある。いうならば「浄土三部経」の解読は善導の解釈によるべきで、勝手な解読は許されない、という姿勢である。

こうした法然上人の姿勢によって、わが国の念仏の教え（浄土教）は成立するのであるが、それは善導の『観経疏』をほかにして、わが国の浄土教、今日の法然上人の浄土宗も、証空上人（一一七七～一二四七）の西山浄土宗も、親鸞聖人（一一七三～一二六二）の浄土真宗もありえなかった、ということがいえる。

二、善導大師の伝記

法然上人は善導の威徳を称えて『善導十徳』という文を記している。それは『漢語燈録』九[6]につぎのように記されている。

一[六]　者至誠念仏ノ徳――真心をこめて休むことなく一心に称名念仏をしたこと。
二[六]　者三昧発得ノ徳――称名念仏の深まりのなか定中（精神統一）において浄土の荘厳（見仏）を見たこと。
三[六]　者光従レ口出ル徳――阿弥陀仏を念ずる一声ごとに、口から光明（化仏）が出たこと。
四[六]　者為レ師ニ決ス疑ヲ徳――師僧である道綽禅師の疑問を解決し往生せしめたこと。
五[六]　者造疏感夢ノ徳――観経疏を撰述する前後に霊験を得たこと。それは聖徳太子や慈覚大師にもあったこと。
六[六]　者化導盛広ノ徳――熱烈な念仏信仰によって人びとを教化したこと。念仏三昧を得て往生をとげたものは無数であったこと。
七[六]　者遺身入滅ノ徳――浄土に往生したいと願って、西に向って枅の樹上から身を投じたと伝えられること。[7]
八[六]　者帝王帰敬ノ徳――当時の皇帝高宗（妃は則天武后）が、善導の威徳を知り、入滅後に光明寺の寺額を下賜したこと。
九[六]　者遺文放光ノ徳――後の中唐の少康（後善導と呼ばれた）が、善導の著書から光明が放たれているのを見たこと。
十[六]　者形像神変ノ徳――少康が、善導の像が不思議な力（神変）をあらわすのを見たこと。

この法然上人の『善導十徳』は、善導の著作やいろいろな伝記にもとづいて、善導の威徳を称えたものである。史実としては認めがたい内容もあるが、法然上人が善導の人格をいかに称えたかが知られる。

善導の伝記は『漢語燈録』九の[8]『浄土五祖伝』三に六種かぞえられる。それは『続高僧伝』二七、『往生西方浄土瑞応删伝』、『新修往生伝』中、『浄土往生伝』中、『念仏鏡』本、『龍舒浄土文』などである。このなかで最も信頼される記事は『続高僧伝』であるが、これは唐の道宣（五九六～六六九）による、善導の生存中の記事である。

近ごろ（終南）山僧善導なるものあり。天下を周遊して求道の師を訪ねもとめたが、終（つい）に山西の山寺における道綽（どうしゃく）教団に出あって、ただ、念仏弥陀浄業を実践する信仰にはいった。

既にして京師（長安）に入り、広く此の化を行ない、『弥陀経』数万巻を写した。士女の奉ずる者、その数無量である。時どき光明寺にあって説法す。

光明寺説法中の善導に人が問うた。「今仏名を念ずれば、きっと浄土に生まれるや否や」。善導曰わく、「念仏定生」。その強い答えに応じてその人は、口に南無阿弥陀仏を称えつづけて光明寺の門を出て、柳樹の頂に上って、合掌、西を望んで念仏し身を投げて死んだ。事、台省（朝廷）にも聞こえた。⑨

(1) 山僧善導は、天下に周遊して道を求めていたが、道綽禅師（五六二～六四五）に会って念仏の教えを受けとめた。

(2) それは善導三五歳前後であったが、自らは念仏一行につとめ、他に念仏の教えを勧めていった。

(3) 念仏の教えにしたがうものは無量の市民、長安の街に出て説法し、数えきれない念仏信者をえていた。

(4) ときに善導の説法を聞いて、念仏定生を確信した一人の男が、光明寺門前の柳の木の上から身を投げて死んだことが、朝廷にも聞こえた。

以上は『続高僧伝』に伝える善導の生存中の記事であるが、善導がいかに熱心な念仏の信仰者であり、また弘通者であったかが窺える。

三、善導大師に関する碑文

善導に関する伝記のほかに、歴史的な資料は、善導大師千二百五〇年遠忌記念出版の『高祖善導大師』のなかに収められている、故塚本善隆先生の論文「唐慈恩寺善導禅師塔碑考―附・章敬寺法照和尚塔銘考―」に四つの碑文が紹介されている。それは、

(1) 唐実際寺故寺主懐惲奉勅隆闡大法師碑並序

(2) 竜興大徳香積寺主浄業法師霊塔銘並序

(3) 河陽上都竜門之陽大唐盧舎那像龕記

(4) 唐太原府交城県石壁寺鐵弥勒像頌並序

である。この四つの碑文によって善導にまつわる史実が明らかにされるので、さきの故塚本善隆先生の論文によって紹介する。

(1)については、

・懐惲は総章元年(六六八)高宗の勅により帝都西明寺(高祖の勅建寺である。一道路を距てて光明寺と相対している)において剃髪す。時に二九歳、道宣没後一年。

・当時善導大師の教化頗る盛なり。懐惲は自ら進んで大師の弟子となり、師侍すること十有余年。よく大師の妙旨秘要を伝承し親しく付属を蒙った。(善導大師入寂に関する竜朔二年(六六二)説は懐惲出家よりも前なれば誤なるは明白。而して永隆二年(六八一)説は、十有余年師侍の記事によく符合することを知る)。

・善導大師の墳墓を、長安と終南山との中間にある丘陵地神和原に営んだ。大師の墳墓は崇霊塔と名付けられた。

・神和原崇塔の側に広く伽藍を構え、また周廻二百歩、十三級の大塔を造った。

・懐惲の名声朝廷に振い永昌元年(六八九)には勅徴されて帝都実際寺主となった。

・以来或は観経、賢護経、弥陀経等を講ずること数十遍に及び、或は仏願力に乗じて浄土に託生せざれば長く苦海に淪溺して出離の時を失うべしとて、言論に際しては懇に時衆に勧めて、四儀の中に一心に阿弥陀仏を専念し、此勝因に乗じて浄土に往生せんことを願うべしと説き、或は広く有縁を勧めて、九重万乗四生六趣の為に寺内において浄土堂を建立し、阿弥陀仏観音勢至を安置し、織成の像を造り荘厳を極める等浄土教の宣揚に尽す所多大

であった。

・大足元年（七〇一）正年無虧、顔色怡悦の中に北首西面奄然として遷化した。時に六二歳。則天武后は神竜元年（七〇五）に隆闡大法師号を贈るに至った。また弟子思荘は大温国寺（実際寺）の寺主となった。

(2)については、

浄業は懐惲と生地（南陽）を同じうし十六年の後輩である。高宗の忌辰に出家し、後神和原香積寺即ち善導墓側に構えられた寺の寺主となり、延和元年（七一二）臨終には門賢を誡誨し、端坐念仏して滅を告げ（五十八歳）、善導大師の墓即ち崇霊塔に陪葬された。門人思瑣をはじめ道俗多数の教化を蒙った人があった。彼は或は善導の直弟ではなかったであろうが、少くとも懐惲と密接な関係があり、かつ善導の教えに帰依し、その芳触に私淑した人であって、また善導没後、長安方面に善導教宣揚の上に懐惲と共に大に力ありし人であった。

(3)については、

此龕記には、実際寺検校僧善道禅師の名が見えている。此善道が浄土教の善導と同一人なりとせば、朝命をうけて有名な竜門の奉先寺大仏の造立事業に重要な任務（検校僧）をはたされたわけで、善導大師が朝廷にも信任せられていたことを示すものである。

(4)については、

唐太宗はかつて、わざわざ石壁に駕をまげて道綽禅師に礼謁し文徳皇后の病を祈願せられた。のみならず、皇后の病癒えてから、特に天下に禅師の恩徳を表彰された。善導大師の師、道綽禅師も唐室の帰頗る厚かった方であったことを知るのである。

このほかに「唐慈恩寺善導禅師塔碑、僧義成撰、李振方正書」と「唐慈恩寺善導和尚塔銘、僧志遇撰并書」なる碑

文名が『宝刻叢書』巻七の長安県の条に出ているが、文面が失なわれている。しかしこの碑文名から見ると善導禅師、善導和尚は、浄土教の善導大師であり、玄奘三蔵が仏典翻訳に従事した大慈恩寺とも深い関係のあったことを、故塚本先生は指摘されている。

四、善導大師の著作

善導の著作は現存するものを五部九巻と呼んでいる。

一、『観無量寿仏経疏』（略称『観経疏』『四帖疏』など）四巻、後に解説する。

二、『転経行道願往生浄土法事讃』（略称『法事讃』）二巻。浄土三部経のなかの『阿弥陀経』を読誦することを中心にして、仏像の周辺を廻り、散華をし讃歎をし、罪過の懺悔をし礼拝・念仏していく宗教儀礼を明らかにしたもの。

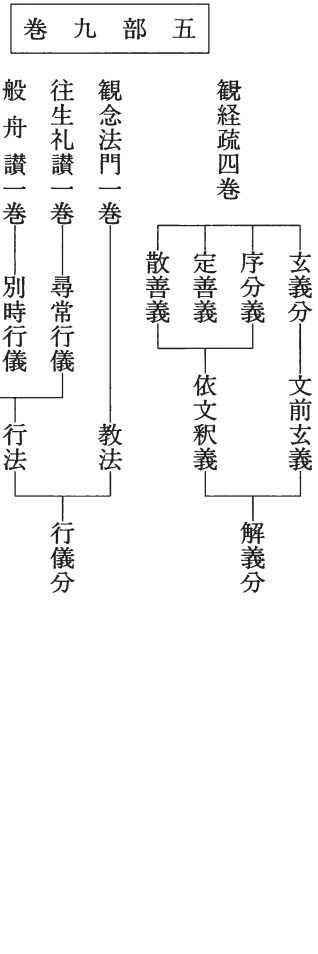
三、『観念阿弥陀仏相海三昧功徳法門』（略称『観念法門』）一巻。『観無量寿経』や『般舟三昧経』などの経典により、観仏三昧や念仏三昧の実践をし、また多くの経典を引用し、自らのあらゆる罪過を告白懺悔する行法を明らかにしたもの。

四、『願往生礼讃偈』（略称『往生礼讃』『六時礼讃』）一巻。一日を六時に分けて、阿弥陀仏を讃歎し礼拝・懺悔する。讃歎する内容は、日没―『無量寿経』の十二光仏名、初夜―『無量寿経』の東方諸仏国の偈（往覲偈）、中夜―竜樹の「十二礼偈」、後夜―天親の『往生論』、晨朝―隋の彦琮の『願往生礼讃偈』、日中―『観無量寿経』によって作られた十六観偈、この日中には「広懺悔」という懺悔文が入っている。

五、『依観経等明般舟三昧行道往生讃』（略称『般舟讃』）一巻。七日あるいは九〇日の修行期を定めて、仏像の周辺を行道しつづけて、浄土を讃歎し礼拝して心を浄土の一境に注いで観仏をこころざす。ただこの讃歎は『般舟三昧経』

によるものでなく『浄土三部経』によった信仰讃歎偈といえる。

この善導の五部九巻の著作について、従来、浄土の教義（思想）を明らかにしていく解義分と、実践・行儀作法を明らかにしていく行儀分とに分ける。



善導はこのほかに『弥陀経義』[10]（『弥陀義』とも称す）、『念仏集』、『大乗布薩法』などの著作のあったことが伝えられているが現存しない。また善導は『観念法門』のなかに「もし、人ありて観経などによりて、浄土荘厳の変（浄土変相図・観経曼陀羅）を畫造して、日夜に宝池を観想すれば、現生に念念に八十億劫の生死の罪を除滅す」[11]と述べているように、善導は浄土変相図の制作を試み、それによって浄土観想の実践をしていたことが知られている。また善導の伝記には「畫するところの浄土変相・三百堵（壁）」[12]とあるなど、善導が浄土変相図・観経曼陀羅の制作につとめていたことは事実のようである。[13]

五、『観経疏』の撰述理由

善導は、人間だれもがわけへだてなく救われる教えを、苦悩し求め続けているときに、山西省の南西にある山寺・石壁山玄中寺において、『観無量寿経』の教えにしたがって、念仏を実践修行している道綽禅師（五六二～六四五）に出会ったのである。道綽は『観無量寿経』の註釈書ともいうべき『安楽集』二巻を著し、阿弥陀仏の名号を称念して、西方浄土に往生する教えを実践し弘通していたのである。

『続高僧伝』（巻二〇）[14]によれば、道綽は『涅槃経』の研鑽につとめていたが、その後、汶水の石壁谷玄中寺にいたり、寺内の石碑に曇鸞の事跡が刻されているのを見て私淑して、ついに浄土教の人となった、と記されている。どこまでも庶民の救われる宗教を求めていたのである。善導も早くから『観無量寿経』を信仰し、念仏の行をつんでいたのであるが、道綽の『観無量寿経』の講説を聞くにおよんで、一層啓発され念仏信仰に確信を持ったものと思われる。そこで善導自身も『観無量寿経』の真意を明らかにすべく、『観経疏』の撰述におよんだのである。

法然上人のあとを継いだ二祖弁長は、善導が『観経疏』四巻を撰述する理由を『浄土宗要集』[15]に、「善導、観経について疏を造りたもうこと、その由来なきにあらず。故にその因縁、弁阿（弁長）これを然師上人（法然）に伝えたてまつるに三義あり。一つには有縁の経なるが故に、二つには相伝の経なるが故に、三つには三昧発得の故に。」とある。まず「有縁の経」というのは、善導が自らの救いをこの経典に求めたことをいい、つぎの「相伝の経」というのは、善導が道綽に出会ってこの経典の相伝を受けたことをいい、最後の「三昧発得」というのは、善導がこの経典の教えによって三昧発得したということである。こうした深いかかわりのある経典であるという理由から、善導は『観経疏』の撰述についたというのである。

いま一つの理由は、善導以前に、地論宗の浄影寺の慧遠（五二三～五九二）の『観無量寿経義疏』二巻、天台宗の智顗（五三八～五九七）の『観無量寿仏経疏』二巻（偽撰ともいわれている）、三論宗の嘉祥寺の吉蔵（五四九～六二三）の『観無量寿経義疏』一巻、あるいは師僧道綽の『安楽集』二巻など、当時の一流の学匠が『観無量寿経』についての註釈書を著しており、これらの註釈書は、いずれも『観無量寿経』に説き示されている真意を開顕していないという善導の不満が、『観経疏』の撰述にいたらしめたということである。

善導はこうした先輩学匠の著した『観無量寿経』の註釈書に対して不満をいだき、これらの註釈書をしりぞけて、『観無量寿経』の真意を開顕すべく、師僧道綽の『安楽集』二巻に影響をうけながら、『観経疏』の撰述についたと思われる。善導が『観経疏』（散善義）の最後に「今この観経の要義を出して、古今を楷定せんと欲す」[16]とあるのは、これまでの『観経』についての註釈書をしりぞけて『観経』の真意の開顕につとめることを表明したものである。古くからこの『観経疏』を『古今楷定之疏』・『楷定之疏』と呼ばれているのは、善導による『観経』の真意の開顕につとめる『観経疏』撰述の理由によるものである。

六、『観経疏』撰述の立場

善導は人間だれもがわけへだてなく救われていく凡入報土の教えを、『観無量寿経』のなかに見出し、この教えを『観経疏』において組織し体系づけていくのである。しかし善導は、『観無量寿経』を説かれた釈尊の真意にかなうかどうか、仏の照鑑をたのみ、霊験を請うて、その証明とするのである。

善導は『観経疏』（散善義）のおわりに、つぎのように記している。

もし三世の諸仏・釈迦仏・阿弥陀仏等の大悲の願意にかなわば、願わくは夢中において、上の所願のごとき一切

の境界の諸相を見ることを得せしめたまえ、と。仏像の前において願を結しおわって、日別に阿弥陀経を誦すること三べん、阿弥陀仏を念ずること三万べんにして、至心に発願す。すなわち当夜において見らく、西方の空中に上のごとき諸相の境界、ことごとくみな顕現す。――中略――すでにこの相を見て、合掌して、観ずることやや久しうしてすなわち覚む。覚めおわって欣喜にたえず。ここにすなわち義門（教え）を条録す。これより已後、毎夜夢中につねに一僧ありて、来りて玄義科文を指授したもう。すでにおわればさらに見えたまわず。[17]

と。善導がこうした深い宗教経験のなかで『観経疏』を撰述したということは、『観経疏』はたんに『観無量寿経』の文字の解釈に終っていないことを表明したものといえる。したがって善導は、この『観経疏』を書きおわって、

後時に脱本しおわって、またさらに至心に七日を要期して、日別に阿弥陀経を誦すること十ぺん、阿弥陀仏を念ずること三万べん、初夜後夜に彼の仏国土の荘厳等の相を観想して、誠心に帰命すること一ら上の法のごとくする。――中略――願わくは、含霊（衆生）をしてこれを聞きて信を生じ、有識（衆生）の覩んものをして西（浄土）に帰せしめんことを。この功徳をもって衆生に回施す。ことごとく菩提心を発し、慈心をもてあい向い、仏眼をもてあい看て、菩提まで眷属し、真の善知識となり、同じく浄国に帰し、共に仏道を成ぜん。この義すでに証を請うて定めおわんぬ。一句一字も加減すべからず。写さんと欲するものは、もっぱら経法のごとくせよ。まさに知るべし。[18]

とある。

善導は、『観無量寿経』の真意を開顕しえたのはたんに文字の解釈によるのではなく、仏の指授によるものである、というのである。そこで「一句一字も加減すべからず」といい、「もっぱら経法のごとくせよ」というのは、『観経疏』がたんなる解釈におわらず、『観経疏』をして『証定之疏』と呼ばしめる所以のものである、というのである。

このことについて法然上人は、『選択本願念仏集』のおわりに、

静かにおもんみれば、善導の観経疏は、これ西方の指南、行者の目足なり。しからずばすなわち西方の行人は、かならずすべからく珍敬すべし。なかについて毎夜夢中に僧ありて玄義を指授す。僧はおそらくはこれ弥陀の応現ならん。しからばいうべし。この疏（観経疏）はこれ弥陀の伝説なりと。いかにいわんや、大唐に相伝えていわく、善導はこれ弥陀の化身なりと。しからばいうべし。またこの文（観経疏）はこれ弥陀の直説なりと。すでに写さんと欲するものは、もはら経法のごとくせよといえり。この言は誠なるかな。[19]

と述べているのである。

このように法然上人は、この善導の『観経疏』を、まさに「弥陀の伝説」、「弥陀の直説」とまでいって、尊重すべきことを強調されているのである。

七、『観経疏』の科文

『観経疏』の正確な書名は、沙門善導集記『観無量寿仏経疏』四巻である。『仏説観無量寿経』を註釈したものであるが、観経玄義分巻第一、観経序分義巻第二、観経正宗分定善義巻第三、観経正宗分散善義巻第四とあり、四巻とも題目を異にしている。

第一巻の玄義分は、観経に説かれている深遠な教義を明らかにする部分であり、善導が観経を註釈する独自な立場を示すとともに、善導の浄土教の特色が明らかにされている。

第二巻の序分義は、経典の分科を序分・正宗分・流通分とする従来のあり方と異なり、序分・正宗分・得益分・流通分・耆闍分という、善導独自の分科を立てて観経の序説の部分を註釈している。

第三巻の定善義は、心を統一して実践する観経に説かれる十六観のなかの十三観までを定善として、これを註釈した部分である。第一観（日想観）から註釈がなされるが、第八観（像想観）には浄土の指方・立相が説かれ、第九観（真身観）には阿弥陀仏の相好・光明摂取が明らかにされている。

第四巻の散善義は、心の散乱するままに実践する観経の定善十三観につづく三観（三福・九品）を註釈する部分であるが、善導の強調する称名念仏はここに説き示されるのである。得益分・流通分・耆闍分もここに含まれるが、最後に『観経疏』撰述の霊験記も記されている。

この『観経疏』四巻の科文はつぎのように示される。

●観経玄義分巻第一

偈頌…十四行（帰敬偈）

- 第一　先標序題
  - 仏出説法…八万四千法門
  - 浄土教興
    - 要門…観経
    - 弘願…大経
- 第二　次釈其名…経題解釈…仏説無量寿観経一巻
- 第三　弁釈宗教
  - 宗
    - 宗旨…観仏三昧為宗、念仏三昧為宗
    - 経体…往生浄土為体
  - 教……菩薩蔵收頓教摂
- 第四　顕説人差別…五種説人……仏自説
  - 定善……前十三観……韋提致請

総論……玄義（七門料簡）

第五　料簡定散

散善……后三観三福九品…仏自説

第六　和会経論相違

一、就諸師解九品

二、以道理破釈

三、重挙九品返対破

四、出文顕証…為凡夫不為聖人

五、会通別時意

六、会通二乗種不生

第七　料簡得益分斉……韋提得益第七観初

●観経序分義巻第二

（仏説無量寿観経）

序文……

証信序……如是我聞

発起序

化前序……一時仏在下

禁父縁……爾時王舎大城下

禁母縁……時阿闍世下

厭苦縁……時韋提希下

欣浄縁……唯願世尊下

散善顕行縁……爾時世尊即便微笑下

●観経正宗分定善義巻第三

〔定善示観縁……仏告阿難下

定善……十三観〔

日　観……初　観　文

水　観……第二観文

地想観（地観）……第三観文

宝樹観……第四観文

宝池観……第五観文

宝楼観……第六観文

華座観……第七観文

像　観……第八観文

真身観……第九観文

観音観……第十観文

勢至観……第十一観文

普　観……第十二観文

雑想観……第十三観文

●観経正宗分散善義巻第四

〔世俗善……

〔正因…三福〔戒　善〔一、総命告命……仏告阿難及韋提希

散善

正行…九品

上品上生十一門義

行善

二、弁定其位……上品上生者

三、総挙有縁……若有衆生下

四、弁定三心……何等為三下

五、簡機堪不……復有三種衆生下

六、受法不同……何等為三下

七、修業時節……具此功徳下

八、廻所修業……回向発願下

九、聖衆迎接……生彼国時下

十、華開遅速……生彼国已

十一、華開後益……見仏色身下至上生者

上品中生乃至下品下生

各品有十一門義

此十一門義者約二対九品之文一就二一一品中一皆有二此十一一（中略）又此義（十一門義）若以レ文來勘者即有二具不具一雖レ有二隠顕一若拠二其通理一悉皆合レ有

上品中生者不必受持読誦下至第十六観

得益分……

総牒……説是語時

能聞法人……韋提希下

韋提得益……応時即見下

侍女得益……五百侍女下

王宮会

流通分……王宮流通……流通分
- 請発之由……爾時阿難下
- 経名……仏告阿難下
- 経宗……汝當受持下
- 勧人奉行
  - 定善……行此三昧者下
  - 念仏……若念仏者下
- 附属流通……念仏……仏告阿難下
- 諸天得益……無量諸天下

耆闍流通……耆闍分
- 序分……爾時世尊下
- 正宗分……爾時阿難下
- 流通分……無量諸天下 至礼仏而退

結語……
- 造疏発願―証定霊相
- 流布祈願―霊相示現
- 結勧流行
  - 本心為レ物不レ為二己身一
  - 同帰浄国共成仏道

会闍耆

八、『観経疏』の特色

善導の『観経疏』は、わが国では古くから『古今楷定疏』あるいは『楷定疏』と呼ばれている。それは善導みずからも「某、今、この観経の要義を出して、古今を楷定せんと欲す」（散善義）と述べているように、観経についての従来の解釈をしりぞけて、独自の解釈を打ち出したのである。従来の解釈とは、慧遠の『観無量寿経義疏』二巻、智顗の『観無量寿仏経疏』二巻、吉蔵の『観無量寿経義疏』一巻などの解釈であるが、善導はこの諸師の解釈に対して不満をいだき、これを否定して独自の解釈をほどこしたのである。

一、観経に説き示される内容を、諸師は観仏三昧を説く経典としたが、善導は観仏三昧と念仏三昧を説く、一経両宗の経典とした。

二、観経に説かれる十六観を、諸師は定善（定機に説かれる教え）とし、三福（世福・戒福・行福）を散善（散機に説かれる教え）とし、定散ともに韋提希の要請によって説かれたとした。しかし善導は十三観までを定善とし、後三観（三福九品）を散善とし、十三観の定善は韋提希の要請によって釈尊が説かれたのであり、三福九品の散善は釈尊が自ら説かれた教えであるとした。

三、諸師の解釈によるならば、観経に説かれる教えは聖者を中心とした教えであり、九品に説かれる教えも、聖者と凡夫に通ずるものであり、阿弥陀仏の身土も応身・応土であるとした。したがってその浄土は聖者も凡夫も同居する浄土（凡聖同居土）とみたのである。しかし善導は、阿弥陀仏とその浄土を報身・報土とし、凡夫が往生するのはまさしく報土（凡入報土）であると強調したのである。

四、観経に説かれる九品の区別を、諸師は各品ごとの機類や証果によって、聖者と凡夫の両者にかかわる区別と解

釈したのに対して、善導は九品のすべてが凡夫（九品皆凡）であるとした。上品は大乗に遇った凡夫、中品は小乗に遇った凡夫、下品は悪に遇った凡夫であるとした。

五、安心（三心）・起行（五種正行）・作業（四修）の実践項目をたてて、これを体系的に論じたのは善導である。諸師の安心・起行についての解釈は判然としないのであるが、善導はこれを強調する。とくに観経に説かれる三心（至誠心・深心・廻向発願心）は、阿弥陀仏の浄土に往生を求めるものの正因としてこれを認め、浄土往生を求めるものの信心の内容（二種深信）をも解明する。また廻向発願心については、念仏実践者の信仰のあり方（二河白道の譬喩）をも明らかにする。なおこの三心を諸師が上三品の心のあり方と解釈するのに対して、善導は九品に通ずるとし、定善（十三観）の実践においてもこれが必要とする。

六、観経に説かれる三心を解釈するなかで、とくに深心（深信）を確立する行として、五種正行をあげる。正行とは読誦・観察・礼拝・称名・讃歎供養の五種であり、善導はこの五種の正行のなかの第四の称名正行を正定業とし、他の四正行を助業とするのである。「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行・住・坐・臥に、時節の久近を問わず、念念に捨てざる、これを正定の業と名づく。かの仏の願に順ずるが故に。」とあるのは、この称名正行・正定業の説明である。

七、凡夫が往生する浄土を、諸師は応土とするが善導は報土であると強調した。しかもその浄土は西方の方角にあるとし、具体的な様相をもつ浄土とした。それは観経の第八像想観を説明するなかで、善導は「また今この観門等はただ方を指し相を立てて、心を住めて境を取らしむ。総て無相離念を明かさず。如来懸知したまう末代罪濁の凡夫は、相を立てて、心を住するすら、なお得ること能わじ。何にいわんや相を離れて事を求めば、術通なき人の空に居して舎を立んがごとしと。」といい、指方立相の浄土観を強調した。

八、善導は観経疏（散善義）の終りのところで、阿弥陀仏の名号を阿難に付属して、「上来、定散両門の益を説きたま

うといえども、仏の本願に望むれば、意、衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り。」と記している。これは称名念仏を諸師が下三品に限るとしたのに対して、善導は九品に通ずとしたものであるが、さらにいえば、観経に定善・散善の教えが説き示されているが、中心的教説はどこまでも称名念仏にあることを強調したものである。

九　『観経疏』の伝来

善導の生存した初唐の時代は、わが国の留学僧もさかんに入唐・留学していた時であり、日唐交流貿易もおこなわれており、当時、観経の浄土変相図や善導の著作もわが国に多く持ち帰られたことは充分に推測されること[20]である。聖徳太子の法隆寺に極楽浄土の壁画が残り、太子のために天寿国繡帳が造られ、天平の盛期（天平宝字七年＝七六三）には、当麻寺の浄土大変相図、つまり当麻曼荼羅が造られ、これが善導の『観経疏』の特色ある説相に合致することが指摘されている。[21]

善導の著作がわが国の天平写経に書写されていることは早くから知られていることである。[22]つまり善導の著作のほとんどが、天平年間にわが国に将来され書写されていたということである。観経疏、西方法事讃、往生礼讃、六時行道、般舟讃などであり、善導の五部九巻といわれている著作のほとんどである。これらの著作が、わが国の奈良・平安時代の仏教思想にどれほどの影響をあたえたか、[23]ここで詳しく論及することはできない。

比叡山の浄土教の祖師、源信の『往生要集』、源隆国と延暦寺阿闍梨による『安養集』、さらに永観の『往生拾因』など、法然以前の浄土教祖師の著作のなかに、善導の著作が介在して、大きくその思想的影響をあたえていることは否定しがたい事実である。法然上人が善導の『観経疏』の文に出会いえたのも、源信の『往生要集』のなかに引かれている善導の『往生礼讃』の「念念相続して畢命を期とするものは、十は即ち十生じ、百は即ち百生ず」[24]とある文に

よって、善導の『観経疏』に近づいていたものと思われる。[25]

法然上人が善導の『観経疏』に出会ったのは承安五年（一一七五）四三歳の時であったという。法然上人は前関白藤原兼実の要請によって『選択本願念仏集』を撰述したが、その『選択集』の最後につぎのように記している。

静におもんみれば、善導の観経の疏は、これ西方の指南・行者の目足なり。しかればすなわち西方の行人かならずすべからく珍敬すべし。――中略――ここにおいて貧道（私は）、昔この典（観経疏）を披閲してほぼ素意を識り、立どころに余行を捨てて、云に念仏に帰す。それよりこのかた今日に至るまで、自行化他ただ念仏を繹とす。しかればすなわちまれに津を問うものには、示すに西方の通津をもってし、たまたま行を尋ぬるものには、誨うるに念仏の別行をもってす。これを信ずるものは多く、信ぜざるものは尠し。浄土の教え、時機を叩きて行運にあたり、念仏の行、水月を感じて昇降をえたり。」

法然上人が善導の『観経疏』の文に出会いえたことによって、念仏の教えを自らの教えとして、またすべての人びとの救いの教えとして、いかに決定づけられたかを窺い知ることができる。いま一つ、法然上人は善導が三昧発得の人であることにその真実性を認めていた。それはやはり『選択集』の終りに、「仰いで本地を討れば、四十八願の法王なり。十劫正覚の唱え、念仏に憑みあり。府して垂迹を訪えば、専修念仏の導師なり。三昧正受の語は往生に疑いなし」と記している。法然上人は本地（弥陀）垂迹（善導）の説でもって善導をとらえ、しかも弥陀の垂迹（化身）と看做される善導の説くことば（三昧正受の語）に、全幅の信頼をおき、疑う余地のないことを明らかにしているのである。

十、『観経疏』の註釈書

善導の『観経疏』四巻についての註釈書は数多くある。とくに浄土宗西山派、真宗等に属する『観経疏』の末書は、

実に数多く認められる。しかしここでは浄土宗に属する主だった註釈書のみ紹介する。

一、観経疏伝通記十五巻（浄土宗全書二）良忠撰。

三祖良忠（一一九九～一二八七）による註釈書で、観経玄義分伝通記六巻、観経序分義伝通記三巻、観経定善義伝通記三巻、観経散善義伝通記三巻。実によく観経疏四巻を註釈されている。良忠は二祖弁長より法然上人の正義を伝承し、その正義・正流を弘通するという意味で伝通記と命名されたという。良忠は観経疏を何回となく講読し、その講録を再三校訂して刊行したという。聖冏の伝通記糅鈔四三巻には、弘安十年（一二八七）五月に良忠は校訂し終ったと記されているが、良忠はその年七月に示寂しており、良忠晩年の最も力を注いだ名著といえる。

二、観経疏伝通記略鈔八巻（浄土宗全書二）良忠撰。

観経玄義分略鈔三巻、観経序分義略鈔一巻、観経定善義略鈔二巻、観経散善義略鈔二巻。この註釈書は弘長二年（一二六二）七月に、高野山の敬忍房の要請に応じて、良忠が書いたという。したがって敬忍房鈔とも呼ばれている。観経疏伝通記よりも二〇数年前の註釈書であり、伝通記より簡略で、伝通記の素材になった著書といえよう。

三、伝通記遅沢鈔（おくさわしょう）十四巻（浄土宗全書続三）良暁撰。

本書は伝通記見聞、あるいは遅沢鈔・坂下鈔ともいう。良忠の弟子・良暁が応長二年（一三一二）二月、伝通記を註釈したものである。

四、伝通記糅鈔四八巻（浄土宗全書三）聖冏撰。

本書は観無量寿経四帖疏伝通記糅鈔という。良忠の観経疏伝通記十五巻を註釈したものである。本書には伝通記糅鈔目録一巻が本文の前にあり、詳しい項目があげられている。序文・奥書には、二七ヶ月かかって、応永二年（一三九五）十二月に完成したとある。白旗流良暁の説と藤田派性真の説と、さらに聖冏自身の説を合糅したという意味で糅

鈔と命名されたというが、広く仏教全般にわたって浄土宗義の普遍性を打ち出そうとした著作であり、聖冏の博引旁証の一面が窺われる。

観経疏を中心とする善導の浄土教思想に関する研究論文は、昭和のはじめからでも約三百篇以上に及ぶ。ここでは善導大師千三百年を記念して出版された論文集を最後に記しておく。

一、『善導大師の思想とその影響』小沢教授頌寿記念―一九七七年・大東出版社。
二、『善導大師』佛教大学宗教部編―一九七九年・大東出版社。
三、『善導大師研究』藤堂恭俊編―一九八〇年・山喜房仏書林。
四、『善導大師の浄土教』藤吉慈海編―一九八〇年・知恩院浄土宗学研究所。
五、『善導教学の研究』佛教大学善導教学研究会編―一九八〇年・東洋文化出版。
六、『善導教学の成立とその展開』戸松啓真編―一九八一年・山喜房仏書林。

註

①選択集（浄土宗務所刊）一三三～四頁。
②浄土宗全書七巻九五頁。
③浄土宗全書九巻三一四頁。
④浄土宗全書九巻三三六頁。
⑤浄土宗全書九巻三六九頁。

⑥浄土宗全書九巻四三一～三頁。

⑦塚本善隆・梅原猛著『不安と欣求』（一四九～五〇頁）には、念仏信者の出門自殺であり、善導の投身自殺でないことを明らかにしている。

⑧浄土宗全書九巻四二五～八頁。

・善導の伝記については、多くの著書・論文をあげることができる。ここでは読み易いものとして、塚本善隆・梅原猛著『不安と欣求』と藤田宏達著『善導』（講談社）の二つを記しておく。

⑨塚本善隆・梅原猛著『不安と欣求』一四八～五〇頁参照。

『続高僧伝』二七の原文はつぎの通りである。

近有二山僧善導者一。周二遊寰寓一。求二訪道津一。行至二西河一。遇二道綽部一。惟行二念佛彌陀淨業一。既入二京師一。廣行二此化一。寫二彌陀經數萬卷一。士女奉者其數無量。時在二光明寺一。說法。有レ人告レ導曰。今念二佛名一。定生二淨土一。不。導曰。念佛定生。其人禮拜訖。口誦二南無阿彌陀佛一。聲聲相次出二光明寺門一。上二柳樹表一。合掌西望。倒投身下。至レ地遂死。事聞二臺省一（大正大蔵経五〇の六八四頁上）

⑩『弥陀経義』・『弥陀義』という書名は、『観経疏』（定善義）のなかに出てくる。（浄土宗全書一の四一・四二頁）。『弥陀経義』百巻とも伝えられている。おそらくは『無量寿経』の註釈書であろう。

⑪浄土宗全書四巻二二八頁。

⑫『新修往生伝』（続浄土宗全書一六の九一頁）。

⑬中国西安市の西北大学校内において、太平坊の実際寺の跡が発掘されており、近年、壁画（浄土変相）の断片や実際寺の寺名の記された石片が出ている。拙稿『日中浄土』六号の「ごあいさつ―中国仏教の動き―」（五頁）参照。

⑭大正大蔵経五〇巻五九三頁下。
⑮浄土宗全書一〇巻一三四頁。
⑯浄土宗全書二巻七二頁。
⑰浄土宗全書二巻七二頁。
⑱浄土宗全書二巻七二～三頁。
⑲選択集（浄土宗務所刊）一二二～三頁。
⑳塚本善隆著作集四『中国仏教史研究』一八四頁。
㉑聖聰（増上寺開山）の『当麻曼陀羅疏』に指摘されているものであるが、これを望月信亨博士が「当麻寺所伝の観経曼陀羅」―『仏教史の諸研究』所収―で明らかにした。
㉒井上光貞著『日本浄土教成立史の研究』四六頁。
㉓大谷旭雄稿「善導『観経疏』流伝考」（『善導大師の思想とその影響』三五一～七二頁）を参照されたい。
㉔浄土宗全書四巻三五六頁。
㉕藤堂恭俊稿「法然・聖光両祖師における善導教学の受容と展開」（『善導大師研究』二二〇頁）を参照されたい。

（髙橋　弘次）

浄　土　宗　聖　典　　第２巻

平成７年１月25日発行

編　集　　浄土宗聖典刊行委員会
編集協力　浄土宗出版室
印　刷　　株式会社 共立社印刷所
発　行　　浄 土 宗

浄土宗宗務庁
〒605 京都市東山区林下町400-8
☎(075)525-2200(代)

浄土宗東京事務所
〒105 東京都港区芝公園4-7-4
☎(03)3436-3351(代)